

# Eureka XI

六年制通信 No.4 令和5年4月28日(金)号

## 無知について

私たちの世代は模擬試験や実際の大学入試に小林秀雄の文章がよく出題されました。「小林の文章＝難解」は常識でしたな、当時は。実際難しいですね。若い頃は読者を驚かそうと、書かなくてもよい表現まで使ったと自分でも言っていますから、読む方が大変なのは当たり前です。しかし、勉強にもなりました。彼は学者ではありません。ですから本物の学者から見れば彼の論考は間違いであったり精緻に欠けていたりするらしいのですが、学者ではないからこそ書けることもあるわけですから、評論家としての小林は多くの人に高い評価を受けてもいます。哲学者の木田元は『なにもかも小林秀雄に教わった』という本を書いていますし、名著『日本教について』の著者山本七平も『小林秀雄の流儀』という本を書いています。君たちも、文春文庫に『考へるヒント』が何冊かシリーズで入っているはずだから手に取ってみるといいよ。

小林の言葉で最も記憶に残っているのは「万人のごとく知らなければいけない。そして自分のごとく信じることだ」で、つまりみんなが知っているのに自分だけが知らないようでは困るが、他人と同じことを信じる必要はない、付和雷同するのはよくないという意味です。無知という言葉がありますが、ここでは知は知識という意味ですね。小林の言う知識は思想的なことも含むと思いますが、そういう難しそうな知識ではなくても私たちは日常的に正しい知識がないために間違っただけのことを信じたり、取り返しのつかないことをしてしまうことがあります。コロナ禍の行動にも恥ずべきものがありました。SNSの世界では無知は致命的です。匿名で悪意に満ちた罵だらけの世界なのですから、知識だけでなく正しい運用ができないといけませんね。

さて、実は無知にはもう一種類あります。「マズローのハンマーの法則」というのがあって、意味は「持っている道具がハンマーしかないとすべてを釘のように扱う」なのですが、もう少し詳しく言うと、自分の持っている知識に合わせて都合よく対象を扱うということです。本当は心理学上の「確証バイアス」のことなのですが、私は実生活の中でよくあることだと思っています。つまり、目の前にある問題を解決しようとしたとき、例えば自分の財力を生かして解決した経験を持つと、財力がハンマーになってしまって、もうその人は財力以外の解決手段をとれずに失敗する、つまり、人はよく自分の得意（だと思っている）ところで失敗するということです。無知という言葉は、一つの手段でうまくいった、その経験から抜け出せないことにも使えそうです。あるいは無知とは、今の自分の置かれた環境、立場、考え方、それらが人類共通であると考えてしまうことだとも言えます。早い話が子ども発想ということです。逆に、知性のあ

る人とは空間的（時間的）にも地理的にも広く考えられます。ということは、今正しいと考えられていることは以前は違ったかもしれない、これから変わっていくかもしれない、地域が違えば自分が正しいと思っていることが通用しないかもしれない、そういう考えができるということです。私たちも知性ある人になれるよう勉強しましょう。

### GW のおすすめ

・ 柚月裕子 『合理的にあり得ない 上水流涼子の解明』 （講談社文庫）

この続編が最近出ました。「解明」のところが「究明」になっています。続編を買ってきて、「解明」の方からもう一度読み直しました。面白いよ。テレビドラマになるのですね。当たりましたよ、予想が。これ、主人公は絶対に天海祐希さんだろうと思っていましたからね。天海さんを思い描いて本を書いたのではないかというくらい、ぴったりです。そういえば「教場」もドラマになっていますが、あの主人公はまさかの木村拓哉で私は驚きましたね。全くイメージが違いますから。警察官ではないな、ありゃ。歩いているのを後ろから見るとアイドルの歩き方ですからね。ちょっと残念。

さて、この本はいわゆる連作短編集です。一話完結ですが最初のエピソードから読まない面白さは半減します。私は上水流と貴山の関係性が好きです。人間に興味のない貴山がひよんなことからカラカルというネコ科の動物を飼うことになるの（「究明」にあるエピソード）ですが、我が子のように大切にする姿と普段の彼とのギャップが面白い。けっこうリアリティがある気がします。謎解きも、短篇集にしては説得力があるし、ドラマともども楽しんでください。ま、ドラマは脚本次第ですけどね。

さて GW ですからね。他にもたくさん本を読みましょう。中1の諸君は是非とも『無人島に生きる十六人』（須川邦彦 新潮文庫）を読んで下さい。これは六年制の諸君が全員読むべき本として私から強く推薦している本です。ムツゴロウさんつながりで『野生のエルザ』（ジョイ・アダムソン著）なんかどうでしょう。私は高1の頃愛読していました。漱石の『坊ちゃん』とか太宰の『お伽草紙』もいいですね。星新一の『ボッコちゃん』から読書生活に入る人もいますよ。『鉄道員』（浅田次郎 集英社文庫）とか『ビタミン F』（重松清 新潮文庫）も読んでほしいな。たぶん時間を忘れますよ。『赤頭巾ちゃん気をつけて』（庄司薫 新潮文庫）は高校時代に読まない大人になってからでは感動しないような気がします。古典では『徒然草』なんかいかがでしょうか。私は旺文社文庫版を時々読み返しています。さらにこの際『木馬と石牛』（金関丈夫 岩波文庫）にチャレンジするとか。これが面白いと思った人はすでに立派な読書人だね。エッセイでは『法医学教室の午後』（西丸與一 朝日文庫）と『父の詫び状』（向田邦子 文春文庫）がお勧めです。最後に一般教養として『ギリシア神話』（中村善也・中務哲郎 岩波ジュニア新書）をお読み下さい。うちの図書館にあります。ちなみに私が若い頃に時間を忘れ、暗くなっているのにも気づかず電気をつけることもなく読んだ本は『アルジャーノンに花束を』（ダニエル・キイス ハヤカワ文庫）でした。ドラマ化されましたよね。

それから、念のために言いますが、何でもいいのですよ、君の好きな本でね。

BGMは 八神純子の 雨の日のひとりごと でした…。